民博・小長谷有紀教授

モンゴルの20世紀

社会主義時代の証言集出版

小長谷有紀教授

日本とモンゴルが国交を樹立して今年で三十五年。しかし草原や遊牧、相撲などそのイメージは断片的で、モンゴル社会の動きに目が向けられる機会は少なかったのではないだろうか。国立民族学博物館（大阪府吹田市）の小長谷有紀教授がこのほどまとめた「モンゴル国における二十世紀（二）―社会主義を闘った人びとの証言」は、旧ソ連と中国という大国のはざまでこの国が刻んだ歩みを詳細に記録。未知の一面を伝える。

モンゴル現代史が専門の小長谷教授は二〇〇三年、このシリーズの第一巻を刊行。今回は同国の政治家ら六人にインタビューし、成果をまとめた。モンゴル日本関係促進協会会長のD・ソドノム氏、新生モンゴルの初代大統領P・オチルバト氏らへの聞き取りも収録している。

伝統的な遊牧生活から世界で二番目の社会主義国となり、現在は市場経済に移行したモンゴル。二十世紀の歩みは平坦でなく、インタビューでも長期政権への批判や旧ソ連、中国との複雑な関係が語られる。

モンゴルの英雄チンギス・ハーンの顕彰をめぐる興味深い記述も。一九六〇年代初頭、旧ソ連は、自国がモンゴル帝国の支配下にあったという歴史を容認せず、活動にかかわった人々を弾圧したという。

小長谷教授は「モンゴルの二十世紀を調べるうち、社会主義を標榜したことはないのにそのメリットをうまく取り入れた戦後の日本の姿がくっきりと見えてきた」と話す。また「モンゴルの国土を守っていくため、日本も含めた外国資本による開発の歴史を整理する必要がある」と指摘する。

同博物館内の書店で販売。一二八一円。☎06・6876・2151

（新開真理）